

『蜻蛉日記』考

——道綱母の予感——

安 貞 淑

『蜻蛉日記』は道綱母が兼家との二十一年間の結婚生活を描いた日記文学作品である。作者は冒頭で夫兼家との結婚生活を自ら不幸なものとして認識し、その不幸な結婚生活のエピソードを回想している。ところが、作品を読んでいくと彼女を悩ませた不幸な事件の前後には作者道綱母の予感を表した記述が多いことに気づく。

本稿では、作品の展開において作者の「予感」が作品の結末とどのように結び付いていくのか、またそれは作品の成立の動機とどのように関連しているのかについて考察してみたい。

一

『蜻蛉日記』に見られる道綱母の歌のうち、露の歌は九首ある。『蜻蛉日記』に詠まれた「露」の語は「涙」または「はかないもの」の比喩として用いられているが、中でも、結婚成立後三日目の露頭の折に詠まれた「露の歌」に注目したい。

また、三日ばかりの朝に、

A しののめにおきける空は思ほえであやしく露と消えかへり
つる

返し、

B さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれは
なになり 九四頁(注1)

結婚成立後三日目の朝ごろ兼家から贈られたAの歌は、「あなたと別れて帰る時の気持ちといったら、まるであの露のように身も消えてしまいうなせつない思いでしたよ」というものであった。ここで露はむなしく消えてしまう兼家自身のたとえである。それに対するBの、道綱母の返歌は「さだめなく消えかへりつる露」つまり、「そのような兼家を頼みにさせられて生きて行かねばならない私はいったい何なのですか」である。予感、それは事をあらかじめ暗示的に感ずることである。この、Bの「そらだのめするわれはなになり」と読んだ道綱母の歌の中にすでに兼家と

の不幸な結婚生活が予見されていたのであろうか。^(注2)

もう一首の「露の歌」にも注目したい。年月が経ち、作者がついに兼家の新邸に迎え入れてもらえそうもなくなり、病気になるた時の歌、

……思ひ臥したれば、あはれ、げにいとをかしかなるところを、命も知らず、人の心も知らねば、「いつしか見せむ」とありしも、さもあらばれ、やみなむかしと思ふもあはれなり。

C 花に咲き実になりかはる世を捨ててうき葉の露とわれぞ消ぬべき 一七四頁

には、蓮の浮き葉の露のように私（道綱母）ははかなく消えてしまふのであろうと兼家との結婚生活の不幸が心細く詠まれている。

以下、結婚当時の兼家との不幸な結婚生活に対する彼女の予感が作品の中でどのように展開していくのかについて考えて見たい。

心理的に不安であるから不吉な予感をするのか、わるい予感があるから不安になるのだろうか。道綱母の結婚は、一夫多妻制の許された社会での結婚ではあったが、親を通した正式な手続を踏んでいた。^(注3) 兼家の作者への愛情は格別なものであったにもかかわらず、彼女は常に兼家に対する不満を漏らしており、結婚当初から彼女の夫に対する不信は異様なほどであった。

まず、兼家との結婚生活に対する作者の不安がよく現れている記事をいくつかあげてみよう。

①見る人も、いとあはれに、忘るまじきさまにのみ語らふめれ

ど、人の心はそれにしたがふべきかと思へば、ただひとへに悲しう心細きことをのみ思ふ。 九六頁

②かくて、日の経るままに、旅の空を思ひやるこちいとあはれなるに、人の心もいと頼もしげには見えなむありける。 八頁

③ 曇り夜の月とわが身のゆくすゑのおぼつかなさはいづれまされり

返りごと、たはぶれのやうに、おしはかる月は西へぞゆくさきはわれのみこそは知るべかりけれなど、頼もしげに見ゆれど、わが家とおぼしきところは、ことになむあんめれば、いと思はずにのみぞ、世はありける。 一二九頁

④さいふいふも、女親といふ人あるかぎりはありけるを、久しうわづらひて、秋のはじめのころほひ空しくなりぬ。さらにせむかたなくわびしきことの世の常の人にはまさりたり。あまたある中に、これはおくれおくれと惑はるるもしく、いかなるにかあらむ、足手などただすくみにすくみて、絶え入るやうにす。 一二九〜三〇頁

⑤かくて、あまたある中にも、頼もしきものに思ふ人、この夏より遠くものしぬべきことのあるを、服果ててとありつれば、このごろ出で立ちなむとす。これを思ふに、心細しと思ふにもおろかなり。……皆人は、「など」「念せさせたまへ」「いみじう忌むなり」などと言ふ。……家に来ても、「などかく、

まがまがしく」とがむるまで、いみじう泣かる。一三八頁
①②は、結婚後まもなく、父倫寧が陸奥守に任せられ、作者と別れる場面である。兼家も倫寧が出立する日にわざわざ来訪し、決して見捨てたりはしないと作者を慰めても「人の心もいと頼もしげには見えず」とひたすら「悲しう心細い」心境である。③は、康保元年、兼家と結婚して十年目の記事である。月夜のころ、兼家としみじみとした話を語り合った昔が思い出され、曇り夜の月と自分の将来とはどちらが不安で頼りないかと歌を詠むと、兼家は将来については心配することはないと返歌をする。しかし、このような兼家に対し、彼女は「頼もしげに見ゆれど、わが家とおぼしきところは、ことになむあんめれば」と、兼家がわが家として思う所は正妻の時姫であろうと推測し不安に包まれる。この予感の結果的に的中してしまう。④の場面には母の死を悲しむ作者の姿が描かれている。一夫多妻の風習の下では、母親の存在は何よりの心の支えである。作者は母がそばにいただけで心強かつたろうし、母の存在のありがたみを心の底から感じていたのであろう。そして、母親が生きている間は兼家への不満もどうにか募らせずに暮らしていけると思っていたのかもしれない。そのかけがえのない母が亡くなってみると、彼女が常日頃不安に思っていた状況が現実になり、案の定、悲しみの余り、手足がこわばり、息絶えそうな失神状態(手足)に陥った。このような状態を見て、父は「親はひとりやはある。などかくはあるぞ」と励まし、兼家も穢

れを意に介さず、見舞にくる。父親の言葉通り作者はなぜこんな
にまで悲しむのか、母の死に対する異様な悲しみぶりである。⑤
は、多くの兄弟の中でもとりわけ頼りにしていた姉との別れの場
面である。出発の日、互いに顔も上げず、ただ向かい合って涙に
くれていると、周りの人たちは、「など」「念ぜさせたまへ」「い
みじう忌むなり」などと言う。家に帰ってきた兼家も「などかく、
まがまがしく」と聞き咎める。

以上、父、母、姉などの作者にとって身近な人との別れは悲し
いものではあるが、彼女には最も頼れるはずの夫兼家の存在があ
るのに、なぜそこまで悲しむのか。特にこれらの場面で注目され
るのは作者の悲嘆にくれた様子に対する周りの人々の言葉、「な
どかくはあるぞ」「いみじう忌むなり」「など」「などかくまがま
がしく」である。

二

このような兼家への不信はついに別れの予感へと進展していく。
次は、日記において初めて見られる兼家との別れの予感を表し
た場面である。

心のどかに暮す日、はかなきこと言ひ言ひのはてに、われも
人も悪しう言ひなりて、うち怨じて出づるになりぬ。：はか
なき仲なれば、かくてやむやうもありなむかし、と思へば、
心細うてながむるほどに、出でし日使ひしゆるするつきの水は、

さながらありけり。 一四八頁

康保三年、のんびりした気分で過していたある日、ささいなことで言い合ったあげくに口喧嘩となり、兼家は「われはいまは来じとす」と言い残して出て行つた。その後、何日も経つたが、兼家からは何の音沙汰もない。作者はやがて二人の仲もこれっきりになるのかと心細く不安に包まれる。

また、前述(一)Cの歌、「花に咲き」の場面にも別れの予感が描かれている。どういふ病気なのだろうか。作者は兼家の新邸造営中、病床につく。憂鬱な気分で床に臥していると、以前には兼家が新邸で一緒に生活する夢をよく作者に語ってくれたが、最近は全くその話には触れないことばかりが気になる。はたして、新邸へ迎え入れられるだろうか。それに対する不安感や苦悩が、「人の心も知らねば」という兼家に対する不信へと変化し、ついに「やみなむかし」と別れの予感に進展していく。

つとめては、「ものすべきことあればなむ。いま明日明後日のほどにも」などあるに、まこととは思はねど、思ひなほるにやあらむと思ふべし、もしはた、このたびばかりにやあらむとこころみるに、やうやうまた日数過ぎゆく。さればよと思ふに、ありしよりもけにもぞ悲しき。 二〇一頁

作者はすでに兼家の心を読み取る勘を持っている。兼家から「用事があるので、今夜は来られない。その代わりに明日か明後日のうちにでも」といわれても本心だとは思わず、兼家が自分の

機嫌を取っているのだと疑う。そして、その不安がひよつとしたら今度の訪れが最後かもしれないという別れの予感へ進展し、だんだんと不訪の日数が重なり、彼女の予感「さればよ」と当たってしまった。

五日の日は司召とて、大将になど、いとどさかえまさりて、いともめでたし。……かかれども、こたみやかぎりならむと思ふ心になりたり。 二二二頁

天禄元年八月五日、兼家は右大将に昇進して出世街道を走る。息子の道綱は十六歳になり、元服を迎える。夜は、方がふさがっているのに、兼家は作者のもとに泊まった。しかし、兼家の昇進や道綱の元服などで作者の家にとっては大きな慶事のはずなのに、明朗な雰囲気は感じられない。却って、作者はまた兼家の訪れも「こたみやかぎりならむ」と、今夜が最後ではないかしらと別れの予感に苛まれる。

返りごとに、「さなむとは告げきこゆとなむ思ひしかど、便なきところに、はたかたうおぼえしかばなむ。見たまひなれにしところにて、いまひとたび聞こゆべくは思ひし」など、絶えたるさまにものしつ。「さもこそはあらめ。便なかなればなむ」とて、あとをたちたり。 三二七頁

天延元年八月末、作者は父倫寧の勧めに従い、広幡中川へ転居する。しばらく経ってから、引越したことに気づいた兼家から歌が贈られるが、その返事を、作者はまるで彼との縁が絶えたよ

うなふうに書き送ったのである。引越し先の広幡中川は京都の郊外にあって、彼女の言葉通り兼家が訪れにくい不便な所である。この広幡中川への転居については、それを「床離れ」と結びつけた柿本奨氏をはじめ、諸説(注5)があり、父倫寧が兼家の心変わりを知り、娘を引き取った処置ではあったが、住み慣れた一条西洞院の家を引き払う前の兼家の不訪や不誠実な態度からすでに作者には兼家とは昔のような関係は続かないだろうという女の勘が働いたからであろう。

以上、このように作者は兼家との結婚生活に対して常に過敏な不安を抱いており、その不安は、いつか彼とは別れるだろうという悪い予感へと進展していったと考えられる。

さらに、その不吉な予感は、日常生活において殆ど彼女の予想した通りの中していく。

三

次に、道綱母の予感を表わした記事の中で、その予感的中しているいくつかの場面をあげてみよう。

これらの場面に使われている表現は「うべ(むべ)なし」「くもしるく」「さればよ」などがある。特に「うべなし」(注6)は、中でも不吉な予感の中した時用いられる特異語で、『蜻蛉日記』に八例も見られる作者の主観的な用法として注目される表現である。

a うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむ

とすらむ

b 一〇〇頁
かくしも安からずおぼえ言ふやうは、このおしはかりし近江になむ文通ふ、さなりたるべしと、世にも言ひ騒ぐ心づきなさになりけり。：四日、また申の時に、一日よりもけにのしりて来るを、「おはしますおはします」と言ひつづくるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつつ、さすがに胸走りするを、近くなれば、ここなるをのこども、中門おし開きて、ひざまづきてをるに、むべもなく引き過ぎぬ。

c 二二六頁
さればよとぞまた思ふに、はしたなきこちすれば、思ひ嘆かるること、さらに言ふかぎりなし。山ならましかば、かく胸塞がる目を見ましやと、うべもなく思ふ。二二五頁

d 二〇八三頁
かくて、異腹のせうとも京にて法師にてあり、ここにかく言ひ出だしたる人、：またの日かへりて、「ささなむ」と思ふ。うべなきことにてもありけるかな。宿世やありけむ。二二八

aとbは兼家の女性関係にかかわる作者の予感的中する場面
で、aは、町の小路の女の出現である。道綱出産後の九月頃、兼
家は町小路女のもとに通い出すが、ある日、道綱母の家から彼が
帰ったあと、なにげなく文箱を開けてみると、兼家の町小路女へ
の手紙が入っていた。作者は「手まさぐり」開けたと言うが、きつ
と女の勘が働いたのであろう。そしてその予感的中してしまう。
作者が兼家にせめてよその女に遣ろうとした手紙を見たというこ
とだけでも知らせようと思い、「うたがはし」の歌を贈ったとこ
ろ、兼家は「むべなう」三夜続けて姿を見せなかったのである。

bでも、やはり道綱母の勘が的中し、兼家と近江との関係は進
み、兼家は十六年間一度も欠かさなかった元日の訪れを怠り、し
かも作者の門前を素通りする。翌朝、仕立て物を取りに使いをよ
こしたついでに兼家から手紙があったので、返事を出したが、ど
うも作者の心は穏やかにならない。それは兼家と近江との関係が
きつと夫婦のような仲になったのだらうという女の勘があったか
らである。そして、四日の午後、召使いたちが声高らかに先払い
をしてくるが、彼女はまた「一日のやうにもこそあれ」と悪い予
感を働かせ、はたして「むべもなく」兼家一行は素通りしてしま
った。

また、cの場面でも兼家に対する作者の不吉な予感的中する。
鳴滝参籠から下山後、兼家はいかにも訪れそうであったが、とう
とう来なかった。作者の家では昼ごろ、兼家の来訪の予告があっ

たので、侍女たちが慌てて家中を片付けたり兼家を迎える準備を
した。しかし、すっかり日が暮れても兼家一行は現れない。様子
を見に行った使いが帰ってきて、隨身たちもみな解散したとい
う。こういう生活は山寺で予想した通りで「うべもなく」当たってし
まったのである。

dは、兼家の他の女性、兼忠女に関する記事である。天禄三年、
現在のような夫婦仲のありさまでは心細いうえに、新しく子宝を
得ることを諦めて、なんとかして素姓のいやしくない養女を一人
迎えて世話をしたいと決心して知人に頼んだところ、兼家と昔関
係のあった兼忠女との間に娘の存在することが分かった。道綱母
は兼忠女の異母兄弟を早速呼んで意中を打診すると、この異母兄
弟の法師も養子縁組に賛成し、志賀の山を訪ねるが、兼忠女は尼
になろうと思案していた矢先であった。作者はこのような兼忠女
の苦境はまったく自分の予想どおりだというのである。
その他、日常において彼女の予感的中している場面をあげて
みると、次の通りである。

⑥兼家の訪問に関するものとして珍しく明るい予感「案のごと」
一四二頁

⑦兼家が作者邸に来訪し、出ていく時の一言に「それもしくく」
と案じたとおり、音沙汰なし。二九二頁

⑧作者が兼家の新邸を迎え入れられなかったその頃、病気をし
て遺書の中で道綱の将来を案じたことも「思ひたまへつるも

しるく」 一七七頁

⑨兼家の新邸について迎え入れられなかったことに対する「思ひもしるく」 一八七頁

⑩兼家の新しい女性、近江の存在に対する「これらをぞ思ひかくらむ。……」 二〇三頁

⑪兼家と兼忠女の娘との対面の場面で、兼家と兼忠女の娘と自分、いずれはこういう対面の場面を「日ごろもかく思ひまうけしかば」と予見。 二八五頁

このように、『蜻蛉日記』には作者の予感をあらわした記事が多く、しかも、その予感は殆ど中している。彼女は日常においてある予感を持っており、結果的に予想したとおりであると、自分の予感を信じようとする姿勢がうかがえる。

さて、次は、「うべなし」の語が用いられた記事の中で、作者の夢に対する態度がうかがわれる場面である。

いとうたておどろおどろしと思ふに、疑ひそひて、をこなるここちすれば、人にも解かせぬ時しもあれ、夢あはする者来たるに、異人の上にて問はずれば、うべもなく、「いかなる人の見たるぞ」と驚きて、「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」とぞ言ふ。「さればよ。これがそらあはせにはあらず。言ひおこせたる僧の疑はしきなり。……」 二七七〜七八頁

この夢は石山寺の法師が見た夢で、法師は作者が袖に月と日と

を受け、その月を足の下に踏み、日を胸に当てて抱いているのを見たという。この夢について、作者はいい加減な夢だと思い、相手にしなかったが、たまたま夢解きに解かせたところ、道綱の将来の繁栄を予見した吉夢であった。しかし、作者はむしろ言つてよこした法師を疑わしく思い、法師の見た夢の啓示を信じないで、法師を疑わしく思った自分の予感を信じ込もうとする。

次は、夢で見た死の予告に対する作者の態度である。

さながら八月になりぬ。ついたちの日、雨降り暮らす。時雨だちたるに、末の時ばかりに晴れて、くつくつぼうし、いとかしかましままで鳴くを聞くにも、「われだにものは」と言はる。いかなるにかあらむ、あやしうも心細う、涙浮かぶ日なり。たたむ月に死ぬべしというさとしもしたれば、この月にやとも思ふ。 三〇四頁

天禄三年八月、時雨のような雨が一日中降り続いた。作者は妙に心細く、涙が浮かんでくる。彼女は三七歳頃、厄年である。先月、この八月に死ぬだろうという予告を受けている。しかし、彼女は本当にこの月に死ぬのかしらと思ひ、死の予告が告げられても心の底からは納得せず、夢の論しを信じていない様子である。

さるうちにも、いまや、今日やと待たる命、やうやう月たちて、日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、さいはひある人こそ命はつづむれ、と思ふに、うべもなく、九月もちぬ。 三〇八頁

今日死ぬか明日死ぬかと死を予告された八月も、だんだん過ぎていき、九月になった。九月が過ぎても死ぬこともなく、幸せな人こそ寿命が短いものだが、まさか自分のような者が死ぬことはあるまいと「うべもなく」予想した通りだと自分の予感を信じようとする。

さて、これらの夢については、従来多く論じられ、石原昭平氏(注)は「道綱母は、僧の夢さえ疑うのであるから、およそ神仏への帰依にはほど遠い距離にいる」とか「道綱母は現実の人々の声による占いが、幸運であればあるほどに、そのような幸福が訪れるはずがない」とか明るい未来を夢見ることなく、悲観的な見方に傾く彼女の暗い人生観を指摘しておられる。

また、森田兼吉氏(注)は、道綱母が夢の中からこれらの夢を選び取り、記した原因に注目し、作者は少なくとも道綱の将来を予言した夢にはある程度以上の信頼を持っていたが、いくら吉夢を見ても、現実にも裏切られ続け、結果は悪夢で終わり、それを信じたくない思いが強いために、夢を見た時期のおのれの不安な心を表すものとして、これらの夢を選び取り、ここに記したと述べておられる。ところが、『蜻蛉日記』は回顧記である。毎日の日記とは違って、日記文学は回想記である故に書く時点で結末がわかっている。森田氏は、別の論文でフィリップ・ルジャンヌの『自伝契約』を取り上げられ、ルジャンヌの言う自伝の諸条件を『蜻蛉日記』がことごとく充足していることを指摘され、とりわ

け、本来日記にはありえない「物語の回顧的な視点」が日記文学の夢の記述には見られるが、これはルジャンヌの言う自伝の主要な特徴の一つであると論じられている。つまり、その日その日に記していく日記では将来を展望できないが、日記文学になると、回想記である故にその先がわかっており、夢の記述はある程度の展望を持ちながら作品の中に取り入れられていることを強調しておられるのである。『蜻蛉日記』に多く見られる作者の「予感」の記述に関しても同じことがいえると思われる。夢の記述中に見られる作者の「予感」の表現もすでに不幸な結末がわかってから書かれたものである。『蜻蛉日記』に記された「予感」とは、夢の記述と同様に作者の今の不幸な人生のすべてを信じたくない心の現れであり、その不幸な人生を描くための有効な表現方法ではないかと思われる。

実際、そのような彼女の「予感」が不幸な結婚生活として次々と現実のものになっていくと、作品の中で自ら、

夕暮になるほどに念誦声に加持したるを、あないみじと聞き
つつ思へば、昔、わが身にあらむこととは夢に思はで、あは
れに心すごきこととて、はた、高やかに、絵にもかき、こ
ちのあまりに言ひにも言ひて、あなゆゆしとかつは思ひさま
にひとつたがはずおぼゆれば、かからむとて、ものの知らせ
言はせたりけるなりけりと、思ひ臥したるほどに…… 二三

六頁

と云うに至る。作者は鳴滝の閑寂な山里生活の中で、念誦の低い声をしみじみと聞きながら、今までの人生を見つめている。振り返ってみると、昔はこのような境遇がわが身に起ろうとは夢にも思わず、高ぶった気持で絵に描いたり黙っていられずと言いつたりしたが、その一方で、まあこれは縁起でもない不安に思ったりしたのはおそらく、こうなるだろうという運命について何かのお告げが自分の将来を暗示してくれたからだろうかと自己を凝視する。作者の言葉通り、この日記には「ゆゆし」「まがまがし」「忌むことなり」という縁起でもない言葉がよく使われている。そして、彼女は常に悪い予感に苛まれていたのかもしれない。今になって作者はその「予感」こそ神霊か何かのお告げであって、自分はこうなる運命であったのかと今の不幸意識を運命として受け止めようとする。

以上のように、『蜻蛉日記』に見られる作者の「予感」の表現を考察した結果、彼女の不幸意識には常に悪い予感が作用しており、彼女の語る兼家との不幸な結婚生活の真相は、彼女の不吉な予感によって展開されているかのようと思われる。つまり、『蜻蛉日記』における作者道綱母の予感を表わした記事は、彼女の表現の特徴でもあり、彼女の不幸な結婚生活を記述するのに、極めて効果的な表現方法の一つとして用いられ、作品形成上の重要な方法であったことが推論できる。そして、それにしろ日常において兼家への不信や不安の余り、不吉な予感を働かせてしまう性格

から逃れない作者は、そのような予感から自由にならない限り、常に不幸な人生を生きるしかなかったが、結果的には「予感」を描くことは兼家との不幸な結婚生活を明らかにするには十分な効果があったと思われる。

その上、論をさらに推し進めるなら、彼女の「予感」は一見マインナス的なイメージとして彼女の不幸意識の根源でもあったが、その不幸意識や自己主張がこの作品を生むエネルギーとなり、夢のさとしより自分の「予感」を信じようとする彼女の自我が強かったからこそ、まさに記念碑的な作品『蜻蛉日記』が成立しえたのではないであろうか。

(注1) 本文の引用は、『蜻蛉日記』新編日本古典文学全集(小学館 平七)による。

(注2) 伊藤博氏「作者の属性」『国文学解釈と鑑賞』昭五三・九

(注3) 森田兼吉氏「道綱母の結婚——一夫一妻制論を考へる——」『日本文学研究』二四号 昭四五・十

(注4) 岡一男氏『道綱母』(有精堂 昭四五・十)

(注5) 岡一男氏『道綱母』(有精堂 昭四五・十)、柿本獎氏「蜻蛉日記中の歌とその詠み人」関西大学『国文学』第二七号)、高群逸枝氏『招婿婚の研究』、川村祐子氏「蜻蛉日記下巻の一考察——中川転居をめぐって」『活水日文』昭六一・三) などがある。

(注6) 上村悦子氏『蜻蛉日記解釈大成』(明治書院 昭五八)

(注7) 石原昭平氏「閉ざされた夢・醒めた夢」蜻蛉日記(国文学
解釈と鑑賞 昭五二・八)

(注8) 森田兼吉氏「『かげろふ』の夢『更級』の夢(『王朝日記の
新研究』笠間書院 平七・十)

(注9) 森田兼吉氏「『かげろふの日記』の拓いたもの——平安女
流日記文学の自伝文学的性格——」(『日記文学の成立と展開』
笠間書院 平八・二)

・この論文は二〇〇二年度東西大学校新任教員研究支援金による
ものである。